パートナー情報誌

香澄

かすみ

Kasumi

センターからのお知らせ 1P
身近な水環境の全国一斉調査結果の報告 1～2P
R8 前期「湖岸植物定点観察」活動報告 3P
R8 前期魚類定点調査の報告 4P
R8 前期図書活動報告 5P
R8 前期図書紹介本一覧 5～6P
霞ヶ浦の河川(その 4) 桜川下流域 7～8P
霞ヶ浦のプランクトンのはなし 8~10P
新加入パートナー紹介・新任職員紹介 10P
編集後記 10P

パートナー情報誌　ＫＡＳＵＭＩ　第４８号（通巻８６号）　　発行日　令和８年１０月３１日

センターからのお知らせ「霞ヶ浦 ECO フェスティバル 2026」開催報告

令和８年８月 23 日の日曜日に、霞ヶ浦水質浄化強調月間最大のイベント「霞ヶ浦 ECO フェスティバル 2026」を開催いたしました。

イベント当日は、市民団体やセンターパートナーをはじめ、湖沼環境研究室、大気・化学物質研究室、環境活動推進課による、環境・科学をテーマとした体験・学習・展示など 22 のブースが並び、会場は終日多くの来場者でにぎわいました。



また、霞ヶ浦流域市町村からは、土浦市の「つちまる」、稲敷市の「稲敷いなのすけ」、鹿嶋市の「ナスカちゃん」、潮来市の「あやめ」が駆け付け、子どもから大人まで多くの来場者との交流を楽しみました。

さらに、産業技術総合研究所の竹下直さんを講師にお迎えし、実験教室「低温の不思議」を開催しました。参加者は、風船や持参した果物などを液体窒素で凍らせて、楽しんでいました。



当日は 2,600 人もの皆様にご来場いただき、大盛況のうちにイベントを終えることができました。

センターパートナーの皆様には、「六角返しと光の万華鏡工作を楽しもう！」ブースの出展にご協力いただきました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

（センター　宮澤）

第 22 回身近な水環境の全国一斉調査結果の報告

活動のねらい

本活動は平成 25 年 6 月の「第１０回身近な水環境の全国一斉調査」から続けて参加している活動です。

第 23 回(令和 8 年)で連続 14 回参加しています。活動のねらいは次のとおりです。

１、　統一的なマニュアルに基づいて河川流域の多くの人たちが調査するので、面的につながりのある結果が得られる。

２、　調査に参加した人たちとの連携を深めることができる。との背景からパートナー有志が参加しています。

○調査の概要

調査日及び参加者数：令和８年６月７日（日）４名（パートナー小松、栗原、杉山、浅野）

調 査 内 容 、 方 法 ： 統一調査マニュアルに基づく気温、水温、試水水温、パックテストによるCOD測定、及びパートナー有志による透視度、電気伝導度を調査しました。

この他、特記事項として水辺の状況・流れ・濁り・散乱ごみ・川の変化についての意見（今と昔）、を実施しました。

調 査 地 点：調査地点は、花室川（精進橋）、巴川（にのはし）の２地点です。

○調査結果

調査地点	調査年 月 日	天候	気温 (℃)	試水水温 (℃)	透視度 (cm)	EC mS/m	T-N mg/l	T-P mg/l	COD測定値（mg/l）		
									１回目	２回目	３回目
花室川 （精進橋）	R8.6.7	曇	20.3	20.1	63.0	25.3	—	—	6	6	5
巴川 （にのはし）	R8.6.7	曇	19.7	18.4	55.0	26.5	—	—	4	4	4

※EC：電気伝導度を表す、数値が低いほど良い。

T-N：全窒素、T-P：全リンを表す。

COD：水の汚れ具合を表わし、数値が低いほど良い

特記事項

花室川（精進橋）～水辺の状況：川の流れなく、水面にゴミ浮いていた。水面の色うすい暗灰色。・釣り人多く、釣り舟４隻確認する。釣れる魚はブラックバスとのこと。

生 き 物：鳥の鳴き声するも、姿見えず。

巴川（にのはし）～水辺の状況：風なく平穏、雑草の繁茂あり。水量やや多く、流れ穏やか。濁り見られず。若干の浮遊物あり。

生 き 物：野鳥の鳴き声有るも、姿見えず。

○活動状況及び調査地点の写真



花室川（精進橋）R8.6.7



花室川（精進橋）R8.6.7



巴川（にのはし）R8.6.7



巴川（にのはし）R8.6.7

（パートナー 浅野）

令和８（2026）年度前期「霞ヶ浦湖岸植物定点観察」活動報告

ヤナギトラノオ(県Ⅱ)など絶滅危惧種を含む注目種や特定外来生物の生育状況を観察した。ヤナギ類にタグを付け、花・果実・葉など詳細に観察・記録した。ハリコウガイゼキショウとマルバヤハズソウが見つかった。手野でオオバナミズキンバイ(特外)を抜き取った。

月/日	ABEFGHIJKL 区**観察概況**　（ＩB･Ⅱ:絶滅危惧ＩＢ類･同Ⅱ類,準:準絶滅危惧,特外:特定外来生物）
R8 4/08	**カワヤナギ**や**オノエヤナギ**の白い柳絮が花のようだった。ノウルシ(国県準)が黄色い花序と葉を広げ、ヤナギトラノオ(県Ⅱ)に蕾が付いた。カサスゲやヌマアゼスゲ(国Ⅱ県ＩＢ)が開花しオニナルコスゲも花穂を付けた。イヌエンジュなどが展葉を開始、オニグルミは雄花穂を出した。A 区落葉樹林でゴヨウアケビが鋸歯縁の５小葉と濃紫色の花序を付けた。
5/13	マルバヤナギの柳絮が見られた。ヤナギトラノオ(県Ⅱ)生育地２ヶ所で終盤の花を確認した。ドクゼリが開花、ジョウロウスゲ(国Ⅱ県準)、ミコシガヤが花穂を付け、**シラスゲ**の花穂を初めて観察した。カサスゲ、オニナルコスゲは果穂になり、減少したアサマスゲ(国準県ＩB)で果茎が数本見つかった。フトイ、ウキヤガラ、コウキヤガラが花序を付けた。
6/10	ヨシやオギの草丈が伸長した。ネズミモチが開花し、タブノキやムクノキに緑色の実が付いた。休耕田のガマに花穂、湖岸のヒメガマの群生に蕾が付いた。ヤマアワが開花、ジョウロウスゲ(国Ⅱ県準)やミコシガヤは果穂になり、ヤブヘビイチゴやドクゼリに実が付いた。特定外来生物オオフサモ、**ナガエツルノゲイトウ**、オオバナミズキンバイが繁茂し花を付けた。
7/08	伸長した**ミズヒマワリ**(特外)が花盛りだ。畦でオグルマが開花し、水辺でマコモの雌花と雄花が見られた。ノアズキ(県準)とエゾミソハギが開花し、ヤナギトラノオ(県Ⅱ)に実が付いた。ワンド近くの水路でアサザ(国準県Ⅱ)が葉を広げていた。果序を付けていたハリコウガイゼキショウは新出種だ。手野でオオバナミズキンバイ(特外)が開花し 73 個体、駆除した。
8/05	ヨシが出穂、マツカサススキが伸長し特徴のある花序を付けた。ノアズキ(県準)、ツルマメ、サネカズラが開花、ツユクサや早咲きの**シロバナサクラタデ**個体群が満開だった。セリ、ハングショウ、アカメガシワ、ゴンズイの実が見られた。盛んに土用伸びをするヤナギ類で若枝や新葉、托葉などを観察した。無毛とされるジャヤナギの若枝や葉柄は有毛だった。
9/09	蓮田で拡散するオオバナミズキンバイ(特外)と混生するミズアオイ(国県準)やオモダカなどを観察した。センニンソウが満開、**ゴキヅル**やタンキリマメ(県Ⅱ)に花や実が付いた。オオブタクサ、アレチヌスビトハギ、アレチウリ(特外)も伸長し花を付けていた。水際ではナガエツルノゲイトウ(特外)がテラス状に大繁茂していた。新出種マルバヤハズソウを確認した。



4月**カワヤナギ/オノエヤナギ**(ヤナギ科)落葉樹
裂開した果実から種子(柳絮)散布



５月**シラスゲ**(カヤツリグサ科)多年草
幅広の白い葉と花茎(雄性頂小穂と雌性側小穂)



６月**ナガエツルノゲイトウ**(ヒユ科)多年草
南米原産,匍匐する茎で旺盛に繁茂



7月**ミズヒマワリ**(キク科)多年草
中南米原産,大型になり枝先に頭花



８月**シロバナサクラタデ**(タデ科)多年草
白い小花を付けた複数の花序枝が垂れる



９月**ゴキヅル**(ウリ科)蔓性１年草
数個の雄花の下に雌花が付き蓋果を結ぶ

(パートナー　二階堂)

令和8(2026)年度前期魚類定点調査の報告

センター近くの霞ヶ浦湖畔6地点で、2か月に1回、魚類調査および水質調査を継続して行っています。上半期は9月の豪雨による水位上昇の影響で2回だけの実施となりましたが、その調査結果を報告します。特筆すべき点は、5月に久しぶりに(2024年以来) ワカサギが22尾、スゴモロコ(2021年以来) が1尾入ったことです。また、7月はアオコが湖全体に多く、特に弁天宮、沖宿、センター下、川尻が多くpHも全域で8.4以上と高い状況でしたが、モツゴ、タイリクバラタナゴ、ツチフキが多く捕獲されました。

表1. 水質調査結果（6地点の最低値と最高値）

測定項目	5月9日			7月11日			9月12日
天候	晴れ	～	晴れ	晴れ	～	曇り	
時刻	9:10	～	11:05	9:10	～	11：25	
気温（℃）	20.0	～	26.5	27.3	～	31.3	
水温（℃）	18.2	～	20.0	26.3	～	30.8	水位上昇により、延期
透明度（cm）	9.0	～	29.0	3.0	～	21.0	
ｐＨ	7.5	～	8.2		8.4	以上	
ＥＣ（mS/m）	31.3	～	35.4	29.6	～	32.3	

表2. 魚類等採捕数（6地点の合計、各地点では投網を4回打つ）

No	種　名	5月9日	7月11日	9月12日	合計
1	モツゴ	3	100	―	103
2	タイリクバラタナゴ	34	59	―	93
3	ボラ	70	20	―	90
4	ツチフキ		75	―	75
5	ギンブナ	3	27	―	30
6	ワカサギ	22		―	22
7	ウキゴリ	4	9	―	13
8	ヌマチチブ	2	10	―	12
9	キンブナ		9	―	9
10	ハス		6	―	6
11	アシシロハゼ	5		―	5
12	タモロコ	3		―	3
13	ブルーギル	2		―	2
14	カマツカ		1	―	1
	カマツカ？		1	―	1
15	スゴモロコ	1		―	1
16	ダントウボウ		2	―	2
17	ヨシノボリ		1	―	1
	魚類合計	149	320	―	469
1	テナガエビ	3	199	―	202
2	スジエビ	124	71	―	195
3	ミシシッピアカミミガメ		1	―	1
	その他合計	127	271	―	398

調査者　パートナー：中村、會田、福井、腰塚（昭）
　　職　　員：仙波、久保谷、栗栖

（センター　栗栖）

令和8(2026)年度前期図書活動報告

1、文献資料室の図書紹介文の作成



（パートナーが選んだおすすめの本コーナー）

活動日は原則毎月第２、第４金曜日です。令和８（2026）年度前期は計 10 日活動しました。紹介した本は、新規購入図書（寄贈図書を含む）を中心に 42 冊でした。紹介本は別掲「令和８（2026）年度前期図書紹介本一覧」のとおりです。また、紹介本そのものはセンター２階交流サロンの「パートナーが選んだおすすめの本コーナー」にありますので、どうぞご覧下さい。

参加パートナー（浅野、高石、小松、桑名）

２、読み聞かせ活動

文献資料室所蔵の絵本、紙芝居等の中から自然保護や水質汚染、地球温暖化など環境問題を題材にしたものを中心に読み聞かせ実演しています。

活動日は原則毎月第４土曜日の午前 11 時～／午後 2 時～の２回です。令和８（2026）年度前期は９月末から令和９年２月末までの空調設備工事による休館の影響で 4,5,6,7,8 月の 5 日間、午前、午後の計 10 回の実演でした。参加者は大人 72 人、子ども 79 人の計 151 人でした。参加者にはパートナー手作りの「しおり等」をプレゼントしています。また、参加者の増加を目指してパートナーによるマジックの実演も取り入れております。

参加パートナー（浅野、森田、江畑、出田）





（読み聞かせ活動）

（パートナー　浅野）

令和 8(2026)年度前期図書紹介本一覧

2026 年 4 月～2026 年 9 月間のセンター文献資料室新規購入図書を中心とした、パートナーによる図書紹介本は下記の 42 冊でした。

書　　名	著　者　名	出　版　社
身近な草の生き方観察 12 か月	鈴木　純	文一総合出版
ごみのゆくえ　～処理のしくみから廃棄まで～　② 資源ごみとリサイクル施設	圭樹社グループ	あすなろ書房
学校のまわりの自然たんけん図鑑　①春の自然	文・写真：谷本　雄治 絵：やました　こうへい	ポプラ社
おいしく食べられる身近な野草・雑草図鑑	岩槻　秀明	ナツメ社
科学のおもしろクイズ図鑑	代田　雪絵	Gakken
不思議で美しい水の図鑑	文・写真：武田　康男	緑書房
地球と生命はいかに生まれ進化したのか	川上　紳一	ニュートンプレス
はじめての梅仕事	榎本　美沙	山と渓谷社

書　　名	著 者 名	出 版 社
出会った魚がわかる図鑑	杉本　幹	永岡書店
生命のつながりとしくみ図鑑	編者：DK 社 訳：矢能　千秋	河出書房新社
見る知るふれあう　学校のまわりの自然たんけん図鑑　②夏の自然	文・写真：谷本　雄治 絵：やました　こうへい	ポプラ社
見る知るふれあう　学校のまわりの自然たんけん図鑑　④冬の自然	文・写真：谷本　雄治 絵：やました　こうへい	ポプラ社
「サザエさん」の歳時記	漫画：長谷川　町子 編集：木村　恵子	朝日新聞出版
湖の地形学	平井　幸弘	古今書院
避難所に行かない防災の教科書	西野　弘章	扶桑社
つぼみのずかん　みずべのはな	稲垣　栄洋	金の星社
世界のふしぎな木の実図鑑	著者：小林智洋・山東智紀 写真：山田英春	創元社
にじ	構成・文：小杉みのり 監修・写真：　武田　康男	岩崎書店
めくるめく元素	宇田　亮子	明日香出版社
神秘的で美しい花図鑑	著・写真：山田　隆彦	ナツメ社
たくさんのふしぎ・風車と水車	文：深井　聰男 絵：深井せつこ	福音館書店
おとなサイエンス	あきとんとん	かんき出版
たくましくて美しい淡水生物図鑑	関　慎太郎	創元社
よくわかる水環境と水質　改訂 2 版	武田　育郎	オーム社
にじ	構成・文：小杉みのり 監修・写真：武田　康男	岩崎書店
じつは身近なホタルのはなし	遊磨　正秀	緑書房
挑戦する田んぼ	安田　弘法	岩崎書店
「里山」入門	富田　啓介	ベレ出版
地球を救う植物のすごい知恵	中西　友子	日経サイエンス
大人も知らない　みのまわりの謎大全	ネルノダイスキ	ダイヤモンド社
森のとびら	文・絵：伊藤　真理子	玄武書房
花　葉　実のたのしい植物実験と観察	1/0 編集部	工学社
ひみつのてっぺん	作：岡林　ちひろ 絵：おおさわ　ちか	ロクリン社
面白くて　眠れなくなる流体力学	石本　健太	PHP 研究所
外来種がいなくなったらどうなるの？	編者：宮本　道人 吉澤　正三	Kaguya　Bookus
絵でわかる　台風のメカニズム	宮本　佳明	講談社
大災害からいのちを守る科学の図鑑	鎌田　浩毅	幻冬舎
ごみのゆくえ処理のしくみから廃棄まで　1 清掃工場と最終処分場	圭樹社グループ	あすなろ書房
身近な生きものの飼い方　2 田畑や森林の生きもの	足立区生物園	すずき出版
自然はすごい	ノダカズキ	ディスカヴァー・トゥエンティワン
トコトンやさしい水質保全の本	高堂　彰二　大岩　敏夫	日刊工業新聞社
はじめてのふしぎに気づいた日	てづか　あみ	パイインターナショナル

（パートナー浅野）

霞ヶ浦の河川（その4） 桜川　下流域

桜川には、上流域における伝説と古典芸能、中流域ののどかな田園、そして、下流域の都市の喧騒と、いろいろな顔がある。

桜川下流域の遺跡としては、藤沢城跡、武者塚古墳、そして、亀城公園などを挙げることが出来る。桜川の下流域は、田土部堰あたりから常磐自動車道と交差する手前までは、つくば市と土浦市の境を出入りし、その後、土浦市街を下って、霞ヶ浦への河口までは約１０ｋｍである。



土浦城址となった「亀城」は小田家の武将今泉三郎の築城によるが、その後、曲折を経て江戸時代には土屋数直一族（一時、松平信興の移封もあったが）によって支配されていた。

近代の土浦を紹介する写真集には、繰り返される洪水の被害状況が随所に掲載されている。

「図説土浦の歴史」には、土浦の洪水は桜川の氾濫と霞ヶ浦からの逆水によるとの説明がなされており、桜川の堤防改修や川口川閘門の設置などの対策が講じられた。桜川は昔、土浦郊外で大きく左に曲がり、亀城の周りから川口を経て霞ヶ浦に入っていた。その地形によって、土浦の中心部は過去何度も水害を被り、水路変更や改修がなされていた。



現在の桜川には、常磐自動車道との交差する橋梁から霞ヶ浦までの間に１０本の橋がある。その中で、歴史的に名所として取り沙汰されている橋が「銭亀橋」であろう。土浦八景にも取り上げられ、内田野帆の句として、「**銭亀夕照　ゆふたちや日の暮直す橋の反**」が残されている。今ではコンクリートであるが、慶長１８年（1613）水戸街道から土浦城（亀城）下への入口として架橋され、その後何度も掛け替えられてきた。更にそのすぐ下流には「匂橋」。車の通れない欄干のあるおもむき豊かな橋で、映画のロケ地にもなっている。



春の土浦の桜川といえば、なんといっても霞ヶ浦への河口付近にある両岸土手沿いの桜並木であり、上流の学園大橋から土浦橋付近までの土手と共に、見頃になればソメイヨシノを楽しませてくれる。

そして、１１月になると開催される花火大会。日本三大競技花火大会のひとつとして、学園大橋の下流側河川敷で取り行われる。戦前から、開催形式を変えながらも続いており、規模も拡大してきた。



下高津、常福寺霊園そばの紅葉ヶ丘の高台から桜川を眺める色川三郎兵衛の銅像が、市川彰の写真集（昭和５５年発行）に収められている。色川は昭和初期、土浦の洪水対策に尽力した。その銅像は戦時下に撤収され、今では台座が残るのみとなっているが、当時はこの台座から桜川を越えて土浦の町が一望できたと記されている。私は今年の夏この台座を訪れたが、今や雑木に囲まれ、桜川も街並みも定かに遠望することはできなかった。桜川下流域を一望できるところとは、いまでは川傍の高層ビル屋上が最適という状況になったようであ

る。

桜川河口に蓮河原町がある。霞ヶ浦への流入口であり、湖岸一面のレンコン畑を彷彿させる町名である。

ここまで来ると、土手はりんりんロードとして、大きな「オランダ型風車」の見える霞ヶ浦総合公園へと続いていく。





（パートナー　　小松）

霞ヶ浦のプランクトンのはなし　―第１回　ミクロキスティス　―

１　はじめに

霞ヶ浦には、300種以上の植物プランクトンや100種以上の動物プランクトンがいます。でも、これらのプランクトンは、一度に出現するわけではありませんし、同じ季節や場所でも、毎年同じプランクトンが出現するとは限りません。まさに、プランクトンとの出会いは、一期一会です。

ここでは、私が出会ったプランクトンを、顕微鏡写真とともに、少しずつ紹介したいと思います。第１回目は、「ミクロキスティス」です。

２ アオコをつくるプランクトン

霞ヶ浦では、毎年、多かれ少なかれ程度の差はあっても「アオコ」が発生しています。アオコとは「青い粉（こな）」の意味で、湖沼（川の場合もあります。）の表面が絵の具を流したように緑色や青緑色になったときに、「アオコが発生」したといいます。また、アオコは藍藻類のプランクトンが異常増殖することにより引き起こされたものをいいますので、ミドリムシや緑藻類のプランクトンなどが増殖して湖水が緑色になっても、アオコが発生したとはいいません。ちなみに、藍藻は、細菌（バクテリア）と同じ原核生物であるため、藍色細菌とか、シアノバクテリアと呼ばれることもあります。

アオコをつくる藍藻といえば、図２の顕微鏡写真のような「ミクロキスティス」がまず思い浮かびますが、アオコを顕微鏡で観察すると、別の藍藻（例えば、ドリコスペルマム（以前は、アナベナと呼んでいました。）やアファニゾメノンなど）がアオコをつくっていることもあります。

実際にアオコを光学顕微鏡の低倍率（対物レンズ 10 倍程度）で観察したものの例が図４～６です。アオコは、採取場所や日時が異なると全く別の種類の藍藻だったりします。藍藻の種類は、顕微鏡で高倍率観察を行って決定（同定といいます。）します。

アオコをつくる藍藻は、ふつう細胞内にガス胞とよばれる空気の袋を持っているため、水面に浮いてきます。また、ガス胞のために、アオコは顕微鏡で観察すると、図２や図４～６のように黒い粒の集まりに見えます。実は、このガス胞は圧力をかけることで簡単につぶすことができ、図３のようにきれいな青緑色の細胞を見ることができます。これだと藍藻という名前に納得できますね。



図1　土浦港に発生したアオコ
（2024 年８月）
写真手前のほうにアオコが浮いています。



図2　ミクロキスティスの顕微鏡写真
黒い粒が、ミクロキスティスの細胞です。
ガス胞があるので黒く見えます。



図3　ミクロキスティスの顕微鏡写真
ガス胞をつぶしたので、青緑色になりました。
（図2とは異なる試料です。）

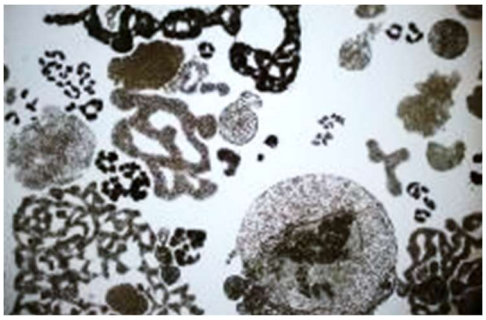


図4　アオコの顕微鏡写真（低倍率）
これは、ミクロキスティスだけですが、群体は
様々な形をしています。

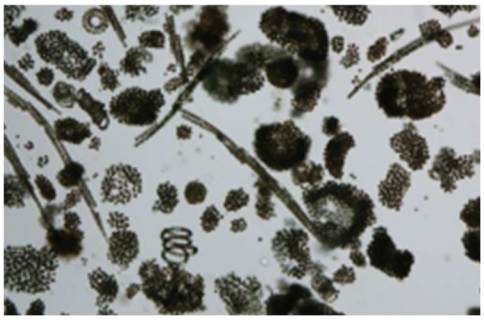


図5　アオコの顕微鏡写真（低倍率）
ミクロキスティスとドリコスペルマム（バネや髪
の毛のように見えるものです。）がいます。



図6　アオコの顕微鏡写真（低倍率）
いろいろな種類のドリコスペルマム（バネや絡み
合った糸のように見えるものです。）がいます。

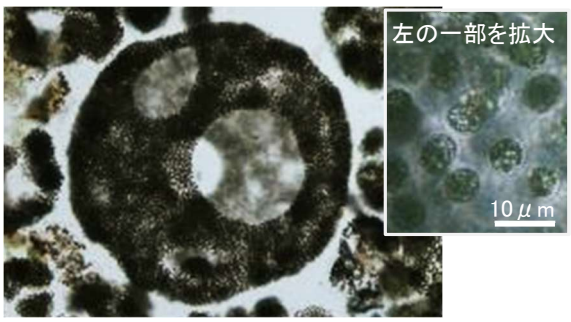
３　ミクロキスティスの群体の形と種類

ミクロキスティスの１つ１つの細胞は、丸い形（球形）をしています。その細胞が多数集合して、群体を形成しています。

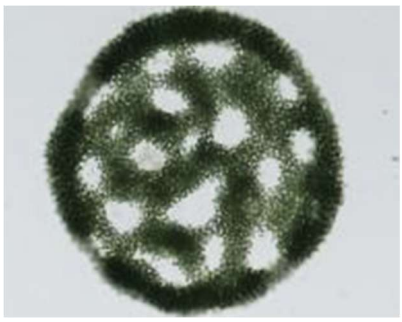
学名のつけ方では、「ミクロキスティス」というのは、属名（似たような特徴を持っているグループの名前）なので、この後ろにその生物の固有の名前を付けると、種名（固有の生物の名前）になります。ミクロキスティスは、細胞の大きさや群体の形、群体を包んでいる寒天質状の膜の有無で種が分けられています。霞ヶ浦で私が種を同定できたミクロキスティスは５種類です。この中で、「ミクロキスティス エルギノーサ」と「ミクロキスティス ベーゼンベルギー」という種が、細胞が大きく、群体の形や膜の有無も見分けやすいので、ここでは紹介します。

①　ミクロキスティス エルギノーサ

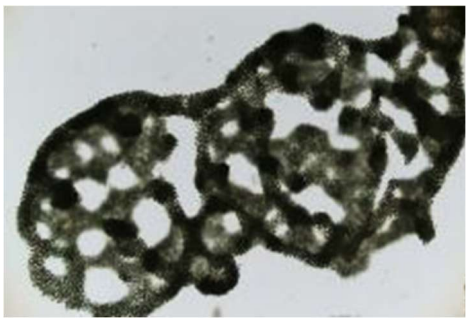
枝分かれした紐状や中空網目の亜球形の群体をつくります。細胞の大きさは５μm くらいです。



これは、きれいな中空網目の球形の群体です。
（こんな形が見つかるのは、ほんとに稀です！）



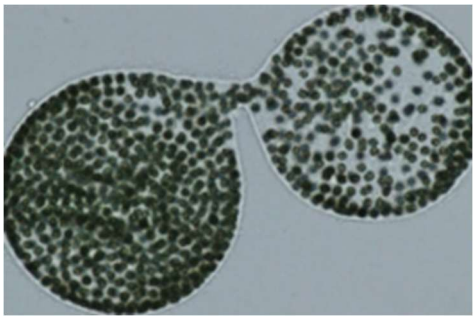
顕微鏡観察では、つぶれて平面状になっているように見えることが多いです。



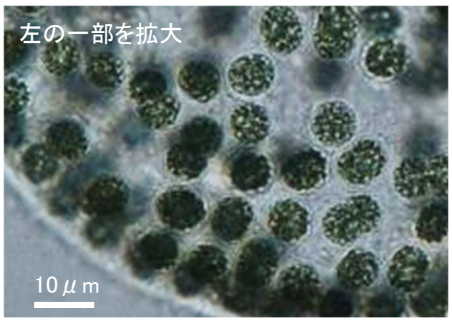
細胞が増殖していくと、次第に形が崩れていきます。

② ミクロキスティス ベーゼンベルギー

群体を包む寒天質状の膜があるのが特徴です。細胞の大きさが８μm くらいになるものもあります。



顕微鏡観察では、群体を包む寒天質状の膜（白く見えるのが膜です。）が確認できます。



ミクロキスティスの中で、1 つの細胞の大きさが最も大きくなる種です。



様々な形の群体をつくります。群体は、1㎜以上に大きくなることもあります。

４　おわりに

ミクロキスティスは、水温が25℃以上になると増殖が盛んになります。夏、次第に水温が高くなってくると、アオコをつくる藍藻はミクロキスティスだけになることが多いようです。さらに、低温にも強いミクロキスティスもいるようで、昨年（2025年）は秋から冬にもミクロキスティスのアオコが見つかりました。私の中では、アオコをつくるプランクトンの中でミクロキスティスは最強の藍藻です。

第２回では、私の一推しの藍藻、「ドリコスペルマム（アナベナ）」を紹介します。お楽しみに。

（パートナー　桑名）

新加入パートナーのご紹介（敬称略）

風見曜代（かざみあきよ）

パートナーに関係する新任センター職員の紹介

環境活動推進課長　塩原隆彦（しおばらたかひこ）

１０月の定期人事異動で環境活動推進課長として赴任しました塩原です。約１０年ぶりに再びこのセンターで仕事ができることをうれしく思っています。これまでの経験を活かし、皆さんと力を合わせ、環境学習や普及啓発、環境保全活動の推進に取り組んでまいりたいと思います。皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。

＊＊＊＜編集後記＞＊＊＊

香澄 48 号は、パートナーの皆様のご協力で堂々10 頁を編むことができました。ご推敲頂いた原稿を忠実に編集、掲載することが私たちの役目であると考えていますが、皆様の活動の全てを理解できず、執筆者のご意向にそぐわないこともあるかと存じます。ご容赦を賜り、お気づきの点等ございましたら、ご指導賜れれば幸いです。

（パートナー　栗原）

「香澄」編集委員会：浅野明宏、有吉潔、二階堂春恵、栗原繁、樽見博文